「お龍さん、能うそんな事を言ひなはるなア、貴女の御世話にならんと、貴女とこの兄さんが死んでやつた時には、宅の人が仕事を二日も休んで手傳ひに行てますせ」
「其の代りに妾處で御膳を食べてなはるやないか」
「宅から醬油を持つて行きましたけども返して貰へしまへんで」
「その代りに借金取りが來たと言ふて斷りの仕様がないので妾處で握り飯を食べさしなはつたやろ」
「左様な事はなんじやい」
「豪そうに言ふない」
「言ふたらどうしたい」
到頭二人が掴み合ひの喧嘩になりました。側に居たお竹はんが、
「マア待ちなはれ、危いがなア、お龍さんお松さんの目玉を掴んで、放しなはれ」
「妾は龍やよつてに、玉を掴む」
「そんな事をしたらいかん。唯方ぞ來とくなはれ、と呼んでも、糊屋の妙廣はんは聾やし、眼鐵さんは盲目やし、アヽ眼鐵さんが來やはつた。危ない、井戸の側にお米の桶が乘せてある。氣をつけとくなはれ（ドブン）井戸へはめたがなあ、お家主さん來とくなあれ」
「これ一寸待ち、そんな事をしたらいかん。待ちと云ふのに、これは私の頭や痛いがな、二人とも待ち、女だてらに無茶な事をして、こら一體お竹はん、如何した事や」
「マアお家主さん聞いとくなはれ、今お龍はんと、お松さんとが質屋の事から利子がどうとか、こうとかで喧嘩が出來ましたんや」
「イヤ解つた。これそんな性無ない事で喧嘩をしなや、質屋の事でお互が利と利で爭ふた處で仕様が無い、又他の長屋へ聞へてもみつとむない。お竹はん私も仲直りしたげたいが今用事がある。これお松さん親父さんが歸つても何も言ひなや、男に聞かして喧嘩に花が咲くといかん。又お龍はんも孝行者のおくしさんにしようむない事を聞かしなや、彼の娘が心配をするで、お竹はん賴むで」
家主さんは歸つて仕舞ひました。
お龍さんもお松さんも内へ這入りましたが、可哀い想にお竹はん、是れから飯を焚いて晝御飯を食べようと思ふていた米も桶も井戸へ陷めて、うらめし想な顏を仕て居る處へ戻つて來たのか孝行娘のおくしさん。油の付いた手を紙で拭きながら、
「お竹はん姐はん」
「オヽおくしさんか、勉强やなア、アヽ一寸今な……お松さんと貴女とこのお母んと喧嘩しはつたんや、家へ歸つても氣嫌が惡いよつてに何も云ひなや」
「おほきに姐はん」